

近代真宗教学の意義

—清沢満之に於ける社会的実践を基軸として—

藤原正寿

清沢満之において、彼の自己自身への厳しい戒めを伴う形で展開した学制の改革は結果としては学生のストライキによる挫折と清沢自身の結核発病としてしか表れなかった。しかしながら清沢自身の、育英教校入学をきっかけとし、教団へ身を置くという選びの中で問われ続けてきた宗教ということの本来の意味の探求、言葉を変えるならば教育ということの意義の内実化の歩みはここにきてより明確になってくるのである。それを語っているのが宗門改革運動の指針となった「教界時言発行の主旨」「革新の要領」である。

況んや大谷派本願寺は、余輩の抛って以て自己の安心を求め、抛って以て同胞の安心を求め、抛って以て世界人類の安心を求めんと期する所の源泉なるに於ておや。

教学は宗門命脈の繫る所、宗門の事業は教学を措いて他にこれあるを見ざるなり。財政の整理や、内事の肅整や、亦た皆な此の教学振興の為の故のみ。故に宗門の当路者たる者は、常に教学の二字を其の脳底に牢記して、須臾も之を忘失すべからず。

世界人類、つまり全ての人の安心の源泉となるべきものこそ、大谷派なる宗門であると確認する清沢は、その宗門の命脈を教学の振興にあると明確に位置付けるのである。この事を基軸として白

川党による宗門改革運動は展開していくのである。

ここでは改革運動に就いては詳しく触れないでおく。しかしながら一つだけ着目しておきたい事がある。それは『白河録』に於ける佐々木月樵、当時山田月樵の次の記述である。『白河録』は、宗門改革運動の経緯を詳しく述べている。かなり量の多いものであるがその最後に、山田は次のように記している。

明治三十六年六月六日 清沢満之師逝去

明治三十九年四月十六日

渥美契縁師逝去

共に我が教学界の恩人なり。慶喜奉讃つとむべし。

この清沢満之と、渥美契縁とはいうまでもなく宗門改革運動の双方を代表する当事者である。この二人の名が挙げてあるということはおそらく宗門改革運動そのものを示そうということであろう。そしてこの二人を「教学界の恩人」と位置付けているということは、この運動を単なる政治運動ではなく、教学的営みとして確認しているということではなからうか。周知のように白川党による宗門改革運動は、その展開の性急さと、運動が政治運動という形をとった為に清沢満之らが願った形では実を結ばなかったのである。形の上では完全に失敗に終わったのがこの運動である。しかしながら清沢満之自身がそうであったように、佐々木月樵もこの運動の顛末によって、宗門の命脈とも言える教学の振興という実践についてその方向性に決定的な覚知を得たということが出来るのではなからうか。白川党の教団改革運動は、形の上ではこのように挫折し、その結果として清沢ら白川党の全員が教団から追放されるということとなった。しかしながら清沢は、ここに於いて今までの彼の求道の歩みに、決定的とも言える方向性を覚知したのである。育英教校入学をその端緒として、さらには栄達の道

を捨てて、選り取った大谷派なる教団へ身を置くということ、これらを通して明確になった教学の振興こそが宗門を支え得る命であり、その為に宗門に於いては優秀な人材を育てる事が大切であるということ、やゝ乱暴に云えば、教学を中心とした体制に教団の機構を変えていくことと人材を育てるシステムを確立するということであった。清沢は、ここに教団の使命を見出したのである。しかし清沢自らも語っているように、教団の体制を変革しようとしてみてもそこに、関わっている人間そのものが変らない限り、何ものも生み出されないということであった。外に向つての改革ということが、この運動の中で人間存在そのものが問われるという内に向う改革へとその方向性を翻したのである。改革運動に破れていく中で、清沢に明確に自覚された事は、それが如何に真面目な働きかけであっても、結局は今有る境遇を代替える事に依つてしか自己の存在を確認できないという自分自身の姿であり、そこに浮彫りにされるのは、他との比較による価値基準に盲目的である欺瞞的存在としての自己であった。このようなものとして自己を決り出した清沢にとつての宗教的实践ということとは、それまで外に見ていた、教団の改革ということと、人材養成ということが、一つの事として、つまり、入れ替えや、比較ということなしに今有る自己の存在に満足していけるといえるような、宗教的主体の確立という一点に集約されるのである。つまり清沢満之に於ける社会的実践とは、親鸞の開頭した仏道への参入ということであり、具体的には、他との比較に依つてではなく、真に一人としてその存在の事実に領いていく者となるという歩みである。さらに「真宗大学条令」によれば、

「真宗大学ハ宗門ノ須要ニ応スル学科ヲ教授シ及其蘊奥ヲ研

究セシムルヲ以テ目的トス」

といわれている。この条令は、本学の井上円氏が「研究所報」で指摘しているように「宗門」という言葉以外は「帝国大学令」のままであり、またそれまでの条令に有った「派内の僧侶ヲシテ」という文字が始めて取られている。ここから伺えるのは、宗門ということがもつ意味はもはや清沢にとつて、限定されたセクトとしての教団を指すものではなく、国家に於ける教育の源泉となるものということであろう。清沢満之は、明治という限定された時代を生きた人であった。その明治に於いてまさに国家がもとめているような教育とは、実は親鸞が開頭した仏道そのものであり、具体的には一人いてその存在を喜ぶと言えような自己を確立する歩みであり、同時にそのことを普遍化し公開していけるような人間となつていく、つまり自信教人信の誠を尽くすべき人物となるということである。清沢満之に於ける社会的実践とはこのこと以外にはないと思う事である。なお、詳細は別稿に譲りたい。